

「ガンプラ」

より美しく、精巧に一。
向上心は尽きません。

株式会社長野西澤書店

代表取締役社長 **西澤 基喜氏**



一身近にも作品を披露したり制作の苦労話を語り合う仲間が増え、充実感を満喫なさっているそうですね。

普段あまり趣味の話はしないのですが、あるとき飲み会で口にした「実は俺も」「俺も」という隠れファンが結構いたんです。それがきっかけでサークルをつくったら仲間が仲間を呼び、登録総勢30人超。折に触れて飲み会を開くようになりました。みんな家族や職場の同僚に話すとドン引きされるから、腹に溜め込んでいる話を存分に語る(笑)。ガンプラがコミュニケーションツールになるなんて、長年続けてきて本当に良かったです。これを読んで「実は俺も」という方！ ぜひ仲間に加わってください。楽しいですよ。

Profile

■西澤 基喜 (にしざわ・もとよし)

昭和50年生まれ、43歳。大学卒業後、東京の出版卸業大手勤務を経て、2002年から現職。趣味はほかに町並み散策、観葉植物の収集。料理は和洋中をこなしパンやスイーツも。

■株式会社長野西澤書店

創業江戸末期の老舗。教科書販売は長野市内31校、官報は県内唯一の専売所。近年は立地を生かし善光寺と周辺地域の書籍を強化、外国人向けの英語版写真集やコミックも好調。



今月は、1980年の発売以来根強い人気を誇るキャラクタープラモデル「ガンプラ」の魅力、長野西澤書店の西澤基喜さんに聞いた。

—アニメ「機動戦士ガンダム」のプラモデル、いわゆる「ガンプラ」は発売当時小学生だった40～50代から子供世代まで幅広いファン層をもち、人気は海外にも広がっています。西澤さんも三十年来のファンだそうですね。

小学1年生のとき、友達の影響で作ったのが始まりです。当時の部品は今のようにはめ込み式ではなかったので、1個1個色を塗っては接着剤でくっつけて苦心して仕上げました。だけど完成品が、箱に印刷された写真のようにカッコ良くない。いつかこんな風になれるようになりたいと憧れて以来三十余年、それなりに腕は上げましたが今だに「これで完璧」という境地に達しません。それが、飽くなき制作意欲の最大の理由なんでしょうね。

—同じキャラクターでも完成品は十人十色、作り手のこだわりがにじみ出るんだとか。

自動車や船舶のプラモと違い、背景にある物語に感動したり「あの戦闘シーンがカッコ良かった」と愛着が膨らむのがガンプラの魅力。最近のモデルは部品に色がついていて組み立てれば即完成ですが、コアなファンはあえてそこに色を塗ります。僕は艶消し目的で、別の人は逆に光沢感を出すために。塗料一つでまったく違う印象に仕上がるから面白いんです。他にも、接合部をパテで隠したり彫刻刀で輪郭を強調したり、こだわればやることはいくらでも(笑)。最近インスタを始めました。関節細部の曲げ方にもこだわった戦闘ポーズをアップしたら、海外からも「GOOD!(いいね)」の反応が来て、嬉しかったですね。